

三、現代医学の盲点の克服と三大難治性疾患（免疫病・悪性腫瘍・精神病）の謎の究明と治療法の樹立について

現代医学の盲点 —— 質量のないエネルギー

現代医学と生命科学と量子物理学には信じがたいほどの盲点があるのを御存知でしょうか？まずこの業界には、完璧にエネルギーが失念されています。

さらにヒトをはじめとする高等動物は動くことが特徴であることもほぼ完璧に忘れていています。それでバイオメカニクスに無知でも医者が務まるのです。ところで質量のないエネルギーで病気が起きることをどれだけ知っていますか？数え上げて下さい。さらにこの業界では、医学や生物学の研究対象に対する定義が一切ないままに、医学者と呼ばれる人達によって、ふわっとした研究生活が日夜せつせとルーティーンの手作業労働のごとくに行われていることです。

例をあげれば、「生命とは何か？」を著わした、量子物理学者のシュレーディンガーは、「生命」を一切定義もしないで無生物の量子物理学的還元手法という、ただただ分子に近いレベルの微小微細な生命体を使って分子生物学をつくるべく提唱しました。その結果 10 万 g でも 5 万 g でも生きるバクテリアやウイルス、原虫や哺乳動物の単離細胞のみを扱う学問分野が出来ましたが、この分子生物学手法ではヒトをはじめとする哺乳動物の体のしくみや進化、免疫系メカニズムについては全く研究する手立てすらないのです。

そして医学にも生命科学にもニュートンの万有引力の法則のもととなる重力エネルギーがほぼ完璧に欠落しています。このエネルギーを無視すれば、どんな高僧でも血液のポンプとして働く心臓の筋肉内のミトコンドリアのエネルギー代謝が破綻して、エコノミー症候群とやらで死んでしまいます。哺乳動物の五感の中に重力エネルギーのセンサーがないので、悟ったはずの天下の高僧の道元禅師も坐禅につぐ坐禅にあけくられて、5 時間しか眠らない横臥睡眠を日常としたために 53 歳で入滅されました。色である肉体 (matter) は空の質量のないエネルギー (matter without mass) と共役して生きているのです。

くまらじゅう
鳩摩羅什の色即是空 空即是色は仏教（哺乳動物の倫理体系）の真髄です。これはヒトをはじめとする哺乳動物にとってエネルギーの空も質量のある水や酸素等の色も、ともに触媒となって細胞内ミトコンドリアのレベルで細胞遺伝子の引き金を引くと言うことを意味しているのです。

身体と感覚器官とエネルギー

ここでおさらいをしましょう。質量のないエネルギーとは光や空間、時間、温熱がこれに相当します。ヒトの五感と言われる知覚は眼・耳・鼻・舌と触覚のことで脳と心の働きつまり心・意まで含めると六感となります。仏教で肉体と精神・意識を五つに分類した五蘊、色・受・想・行・識は森羅万象を把握する心身の二法です。色が肉体と質量のある物質の食物や酸素、受が感覚であり細胞の働き、つまりエネルギーで想が想念でやはり質量のないエネルギー、行とは心の作用で動く筋肉運動で、やはり筋肉細胞の働きでエネルギー、識とは意識のことで、外界と心の源の臓器つまり腸管の働きとを結ぶ窓口の脳細胞の働きでやはり質量のないエネルギーです。考えてみると五感のうち鼻の嗅覚と味覚・触覚以外はすべて質量のないエネルギーが対象となっていることがわかります。この世の中が質量のある物質だけで成立しているとする 19 世紀の唯物思想がいかにもろかったかが改めて思い知らされます。鳩摩羅什のこの仏教の深い思索の中にも入っていなかったのが重力エネルギーです。それで天下の大秀才の道元さまも入宋して曹洞禅の秘奥を究めても、お師匠様すらわからなかったことは悟りようがなく、悟ったと錯覚したままに帰朝して興聖寺を開き、さらに永平寺を開いて坐禅につぐ坐禅で、高僧としては随分と若くして 53 歳にて入滅されました。これは血液を座位の頭頂部の脳まで押し上げるための心臓ポンプが働き過ぎで、心筋細胞内に無数に存在するミトコンドリアの生命エネルギー産生能が破綻したためです。

血液は液状といえども質量のある物質ですから、座位では水平に横臥している時よりも、はるかに位置のエネルギーの勾配（高低差）が大きくなります。この血液の位置のエネルギー（potential energy と言う）は体の外から見ても、悟ったと誤解した禅師にもちっとも感知できなかったから解らなかったと言うことです。つまり宋のお師匠様も自身も心身脱落して悟ったのだとした確固たる信念と自覚は、地上における重力の失念された宇宙の体得だったのでした。悟ったと思ったのは完璧な錯覚であったと言うことです。

しかしこれも無理からぬ事かも知れません。何故なら 20 世紀と 21 世紀の大天才のアインシュタインもファインマンも重力だけは量子電磁波動力学とは独立した存在で弱すぎてどうすることも出来ないと言っているからです。ところが高等動物の発生学の背後に潜むメカニズムを考えると、どうしても動物自体が発する生命エネルギーと力学エネルギー（ミトコンドリアのエネルギー産生

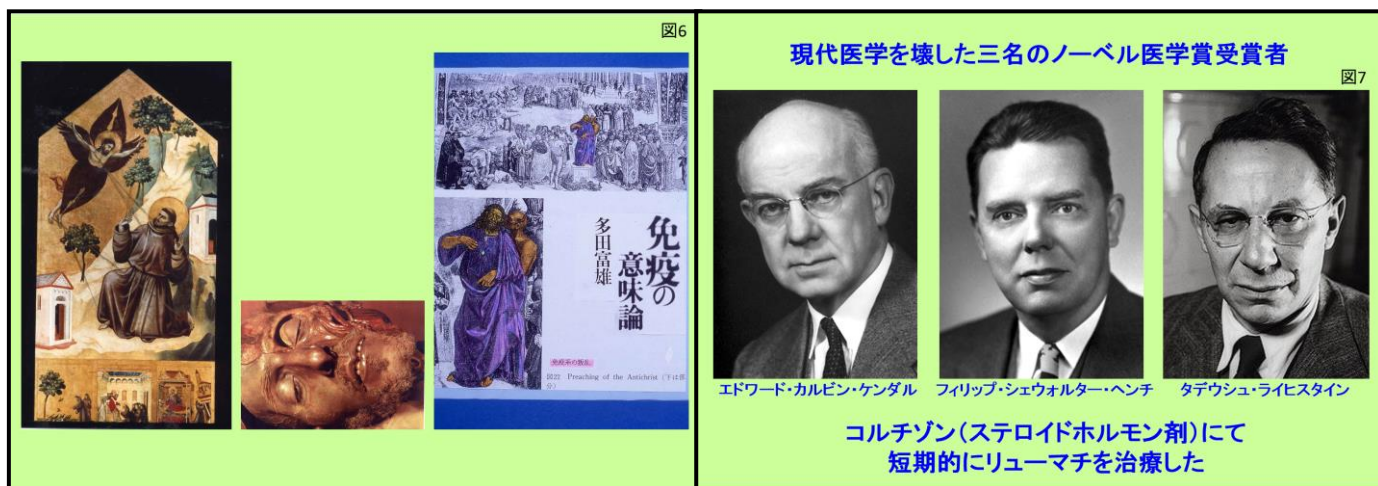
と生体力学エネルギー) の他に地球の引力である重力エネルギーを想定しないかぎり、メカニカルのつじつまが合わないことが自ずと解った学者がほんの少々存在していたのでした。

迷路の免疫学と群盲医学

「群盲象をなでる」ということわざを御存じでしょう。今日の医者はまだで群盲集団で、患者様を手探りして「これが象かな？」とやっているごとくです。

今日肩で風邪を切って歩いているのが「迷路の免疫学」者と「群盲医学」者です(図6 悪魔のキリストを操る図と免疫の意味論の本)。図6左、ジョットのキリスト昇天—重力が蒸発している。図6中、フィレンツェ大学ラ・スペコラ博物館にある梅毒に罹患したキリストの想像解剖模型(破戒僧のズンボ作)—基督教社会にも覚めたヒトが存在したことを示す。

治る西洋医学を完璧に破壊したのが、1950年のエドワード・ケンダル、フィリップ・ヘンチ、タデウシュ・ライヒスタインの三人の医学者(図7)です。彼等はコルチゾンでリウマチを短期的に治してノーベル医学賞を受賞しました。それ以後治ることのない対症療法だけの医療に切り替わったのです。40~50年



前に常識とされた日和見感染症がこれで完璧に葬り去られて、すべての原因がアレルギーかストレスという訳のわからない原因にされたのです。こうしてこの70年間も経過して、今や完璧に西洋医学が壊れました。今こそエネルギーを導入した治る西洋医学の復活と、治る東洋医学(鍼灸・あんま・柔道整復他)の復興の時、生体力学を導入した医療ルネサンスが我が日本から始まる時が来ました。